歴史点描３３　　網干出身のジャーナリスト太田宇之助と「興浜の干拓」

朝日新聞記者として活躍していた太田宇之助は、孫文・蒋介石など中国の要人とのインタビュー記事やスクープ記事はもちろん、戦後もたくさんの論説を発表し続けていた。太田宇之助研究の第一人者である島田大輔氏によると、これほどの数の記事や論説を発表した人物は他にないだろうとのこと。宇之助の残した資料の大半が、長女縫田曄子氏により、横浜開港資料館に寄贈されている。その中に「太田宇之助日記」があり、横浜開港資料館紀要に、昭和 15 年～20 年までの分が翻刻紹介されている。戦前期の日中関係史の重要な記録であるのだが、宇之助にとって忘れられない郷里網干に関する事も詳細に書き留められ率直な心情が記されている。

昭和 20 年 10 月 5 日（金）
「兄（太田覺治郎）の話に、長い間問題となっている興浜の海岸味岡と通称される地域を干拓して畑地とするの計画は、最近食糧増産の風潮から愈々実現性を帯びるに至り、近日県庁から視察することになったといふ。予は兄より詳しい話を聞いて、是非県の役人任せにしたり、官庁に依頼することなく、興浜部落を中心にして組合事業とすること、兄が自ら進んでその中心となって之が実現に努め、兄の一生の事業とすべきことを切に希望しておいた。兄は世話好きであるが冒険の勇気乏しいので、兎角消極的になる男で充分予の勧めに応ずる気持ちを有せぬようだが、部落中心として出来るだけ県の補助を得て実現に努力する気持ちになったようだ。」

干拓記念碑文には着工昭和 20 年 10 月 17 日とあり、記念式典では太田覺治郎が干拓委員長として挨拶している。この兄弟の会話が、兄太田覺治郎に覚悟を促し、興浜の干拓実現につなげたといっても過言ではないだろう。
昭和 14 年の『網干案内』には、網干港修築計画図が附されており、すでに埋め立ての計画があったのだ。着工までの道のりの長さや太田覺治郎が一人で何度も県庁へ請願に出向いていたことを知る宇之助は、自叙伝にも干拓実現を非常にうれしい出来事として記している。

関係者集合写真
（前列中央）太田覺治郎

網干町歌にある「我らが父祖の土地」は、この干拓や網干臨海大橋の開通、漁港の整備などによってどんどん広がり、海岸線は南へ移動し、塩田や砂浜は消滅している。当時の堤防跡は残っているが、堤防の向こうが潮干狩りや海水浴でにぎわっていたのも、今は昔の話である。

網干歴史講座　御津町　植田　実加子

干拓記念碑建立式典

現在も残っている堤防の一部